
お祭りの夜に

藍沢 砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お祭りの夜に

【Nコード】

N84410

【作者名】

藍沢 砂糖

【あらすじ】

幽霊か、それとも妖怪か。よく解らない。

この森には不思議な女の子がいる。

あの子が帰ってくるまでの間、この神社の森で私が体験した不思議なお話をちよつとだけ紹介しましょう。

小学校六年生の頃、夏祭りの夜に神社の裏の森で肝試しをする事になった千賀子と健。

そこは別の世界と繋がっていて、妖怪や幽霊がわんさか居るとの曰

くのある森。

その暗い森の中で千賀子たちは紅い浴衣を着た不思議な少女に出逢う。

鐘を鳴らす音、太鼓を叩く音。

賑やかで楽しげなお祭り囃子はやしが聞こえてきます。いつもは閑静な神社の参道もこの夏祭りの夜だけはいつもの静けさが嘘のように騒がしくなり、沢山の人が集まります。

夫は今年で六才になる娘にせがまれてヨーヨー釣りに駆り出されて行きました。直ぐ戻って来るから、と言いついて残っていたのですがなかなか戻ってきません。きつとヨーヨー釣りだけでなく輪投げも碁石投げもスーパーボール掬いにも付き合わされているのでしょうか。きつと夫の財布は空っぽになっている事でしょう。夫も娘には甘いですから。お陰で私は置いてきぼりの一人ぼっち。私は一人、鳥居の台石に腰を下ろしました。屋台からは美味しそうな焼きそばやたこ焼きのソースの匂いが鼻を掠めて急にお腹が減ってきますがここは我慢。ダイエット中という事もありますが一人でそんな物を食べている所を娘に見つかったら、お母さんだけズルイ！ とごねられてしまいます。ちよつと鬱陶うつとうしいのですが、それもまた可愛いのですかね。

目の前を横切って行くアニメキャラクターのお面を着けた浴衣姿の子供達、鉢巻たくまを巻いた逞しい躰つきのお兄さん、お祭り気分とお酒に酔って顔を赤くしているおじさん、赤と黒の金魚が入った袋を提げた女の子、手を繋いで身を寄せ合いながら幸せそうな顔をしている若い男女。私はそんな笑顔の流れを朦朧ぼんやりと眺めています。

この町の人々は年に一度のこのお祭りを心から楽しみにしているのです。勿論私も、私の家族も楽しみにしていました。いい大人がお祭りを楽しみにしているなんて可笑しいでしょうか。きつと子供っぽく思われるでしょう。

私はこの町で生まれて、この町で育ちました。だからこの夏祭りにも沢山の思い出があるのです。毎年、このお祭りに来ると子供の

頃の思い出が蘇ってきます。楽しい思い出、嬉しい思い出、そしてちょっと不思議な思い出も。

三十年近くこの町に住んでいるくせに恥ずかしながらこの神社が何を祭っているのかも善く知らないのですが、子供の頃の私達にとつてここは善い遊び場でした。でも今の子供達は家でテレビゲームばかりしていて神社の境内などではあまり遊ばなくなっているらしいので何か寂しい気がします。

ふとした私の感傷を慰めるように心地良い夜風が頬を撫でます。険しい顔をしながら人混みを掻き分けて夫が帰ってきました。背の低い娘は行き交う人々に隠れてしまっているのかその姿は未だ見えません。

夫は私の姿を見とめるなり、

「おい、千賀子^{ちかこ}」

と手を振りながら私を呼びます。

「あらあら、遅かったじゃないの。随分振り回されてのね」

夫は私のいる鳥居の元へ駆け寄ってきます。

「あれ？ あいつ、ここに戻ってきてないのか？」

きょとんと眼を丸くする夫は不思議そうに辺りを見回しています。

「え、あの子なら見てないけど…どうしたの？」
すると誤魔化すような苦笑いを浮かべながら私から目を逸らして、夫は気不味そうに口を開きました。どうやら夫は途中で娘と逸^{はく}れてしまったそうなのです。これは大変だ。

夫の話では、娘がスマートボールをやりたいと言い出した時だそうです。遊び方の解らない娘にゲームのコツを教えている内に齡^{せい}甲斐もなく夫がスマートボールに夢中になってしまい、気が付けば娘はいなくなってしまうていたそうなのです。

俺はダメな親父だ！ と嘆く夫。

本当ダメな親父ね。 と擲^{からか}う私。

「お前…何でそんな呑^{のん}気にいられるんだよ」

「だってこの神社、そんなに広くないじゃん。迷子になったって直

ぐに見つかるわよ」

「でも、もし誘拐でもされたら…」

夫の顔がみるみる青褪めていく。きつと最悪の状況でも想像しているのでしょうか。

「大丈夫よ。あの子もそんな悪い人について行く程バカじゃないから」

「そうかなあ…あいつもお前に似て呑気だから…」

その言葉を聞いて私はキツと夫の顔を睨む、すると青菜に塩の如く小さくしななと萎れる夫。まるで風船の空気が抜けていくようで可笑しかった。私は思わず笑みが零れました。

「変な奴について行つてなくても…もし境内の奥の森にでも迷い込んでたら…」

境内の裏手には小さいながらも鎮守の森があります。昼間は木漏れ日の差す散歩道としてお年寄りも利用するような場所なのですが、夜は少しばかり勝手が違う。

本当に真つ暗なのです。夜の森には私も子供の頃は絶対に近寄りたくありませんでした。正直言つて今でもあまり近寄りたくない。鬱蒼と生い茂る木々はまるで怪物の伸ばした手のように星空さえも覆い隠し、木の幹も悪魔が噛み掛けているように見えるのです。それに轍が闇夜に隠されてしまふ為に知らず知らずの間に道を外れていて森の中で迷子になってしまひそうになるのです。

極めつけには墓地。そう墓地があります。森を奥へと進んで行くといつそりと佇む小さな墓地があります。十個ぐらいのお墓が並んでいるだけの狭い墓地なのですが、そのいつそり具合が余計に不気味です。あんな所、昼間でも行きたくありません。

それに、怖ろしいのはそれだけではありません。その森にはある噂があります。

ある噂が…。

森の奥には別の世界への入り口がある…。子供の頃、そんな事を皆言っていました。あの世に繋がっている、地獄に繋がっている、魔

界に繋がっている、異次元に繋がっている。はたまた未来に繋がっている、過去に繋がっている。噂は様々でした。勿論この森の奥で異界への穴など私も見た事はありませんが兎に角そんな噂を皆知っていました。その穴から悪い妖怪が出て来て子供を食べてしまう、死神が現れて地獄へ連れて行かれる、落ち武者の幽霊に取り憑かれる…。森に纏^まわる怪談は本当に数えきれないくらい沢山あります。だから子供の頃の私達は決して夜の森へは一人で近寄りませんでした。食べられるのも、地獄へ行くのも、取り憑かれるのもまっぴらごめんです。夫もその噂は善く知っています。流石にもう、いい大人なので信じてはいないようですが。

「俺、ちよつと探して来るわ…」

自分の不注意で娘を迷子にしてしまった罪悪感に苛まれた夫はいてもたっても居られないという様子で境内の奥へと駆け出そうと背を向けます。

「まあ、良いんじゃない…」

はあ？ と漏らして振り返った夫は怪訝な顔で私を睨みつけます。娘が迷子なのにお前は何て呑気な事を言ってるんだ、と私を非難するような目です。

「だってあの子はもう六才よ」

「未だ（、、）六才なんだ！」

間髪入れず夫は言い返してきました。

「あの子も冒険したい年頃なんじゃないかな…ほら、この神社に来たのも七五三以来だし況してや夜に家の外に出るなんて滅多にない事でしょ？ 飽きたら直ぐに帰ってくるよ。それに、もし森に這入っても大丈夫よ。私には分かる…」

「何の根拠があるんだよ」

「なんとなく」

私には分かります。呆れたように溜め息を吐く夫。それでも未だそわそわして落ち着かない夫に私は百円玉を三枚渡す。

「ほら、これで飲み物でも買ってきてのんびり待ちましょ」

渋った顔のまま三百円を受け取った夫は鳥居の隣の屋台から氷水に漬かった缶ビールを買ってきて私の隣に腰を下ろしました。

ぶしゅ、と缶を開ける音。気持ちを落ち着ける為に冷たいビールをごくごくと喉に流し込む夫はまるで大人の姿をした子供のようにです。

境内の奥の不思議な森。やっぱりちよつと怖いけど、不思議な森私には分かる。きっと大丈夫。娘は心配ない、と。もしかすると噂は本当なのかもしれない。幽霊か、それとも妖怪か。よく解らない。この森には不思議な女の子がいる。

あの子が帰って来るまでの間、この神社の奥の森で私が体験した不思議なお話をちよつとだけ紹介しましょう。もう何年前になるのでしょうか。十年、否、^{いや}もっと前でしょうか。

私が未だ小学生だった頃のお話です。

夏祭りの夜。私達、六年三組の仲良し四人組は神社の鳥居前で顔を寄せ合っていました。

「よし、お前ら…覚悟は出来たか？」と剛君^{たけし}。

やんちゃ坊主の剛君はクラスでも中心的な存在でいつも私達をぐいぐいと引つ張ってくれます。そんな剛君も今夜ばかりは神妙な面持ち。私達に覚悟は出来たか、と質しながらもそれは自分自身に言っているような様子です。

「本当にやるの…」と梢ちゃん^{しほちゃん}。

超が付く程に怖がりの梢ちゃんは剛君の提案にいまいち乗り気ではないようです。六年生にもなつて夜、一人でトイレに行くのも憚^{はば}れるような小心者です。修学旅行の時、夜中に彼女のトイレに付き合わされたのも良い思い出です。

「やっぱり…昼間にしない？」と私。

梢ちゃんと同じく私も乗り気ではありません。どうも暗いのは苦手です。剛君の気が変わってくれるのを内心願いながら、私はごく

りと生唾を飲み込みました。でも剛君は言い出したら絶対に意見を
変えないので半ば諦めています。

「ふんっ、全然怖くなんかねえよ」と健君^{けん}。

いつも自信満々でちよっぴり冷淡な健君はぶっきらぼうにそう応^{こた}
えました。胸の前で腕を組んでふんと鼻を鳴らすのが癖の健君はク
ラスでも無口な方なのですが何故か正反対な性格の剛君とは馬が合
うらしく彼とはよく一緒に居ます。横柄な態度の健君ですが、いざ
という時はとても頼りになるのです。

事の発端は一週間前。剛君は私達にとんでもない計画を発表した
のです。

―肝試し大会するぜ！

思い立ったようにそんな事を口にした剛君。その詳細は夏祭りの
夜に四人で神社の裏の鎮守の森に這入って肝試しをするというもの
でした。

血走った眼で私達を順番に見る剛君。真っ青になる私と梢ちゃん。
そして、お決まりのように鼻を鳴らす健君。私達が了承する前に
剛君は半ば強引にその企画を決定としてしまいました。

そして今に至るといふ事なのです。

「おっしやあ、行くぜ！」

剛君は掛け声と共に士気を奮い立たせながら鳥居をくぐり、歩を
進めて行く。それにおずおずと着いて行く私と梢ちゃん。その後ろ
を余裕の表情で歩いている健君。その時、健君は私の顔を後ろから
覗き込んできました。

「おい、千賀子。どうしたんだよ、怖いのか？」

健君はにやりと口元を緩めて私を揶う。

「こ、怖くなんかないもん！」

私は精一杯強がって健君に伝える。勿論、本当は怖かったですよ。
そんな私の気持ちを見透かすように健君は面白そうに笑っています。
「もう、健君のイジワル！」

私は湯の沸いた薬缶^{やかん}のように怒鳴りました。でも、健君の顔が私

の顔の近くに寄って来た時、私の心臓は破裂してしまいそうな程どきどきと高鳴っていました。

そうです。

私は健君の事が…好きなのです。一見無愛想でいつもそっけない態度の健君ですが、本当はとても優しい男の子なのです。私は分かっていました。バレンタインの日に健君に手作りチョコレートをプレゼントした時もそうでした。

「俺、甘い物キライなんだよな」

と、文句を言いながらも受け取ってくれて次の日、「甘過ぎて不味かったよ、でもまあ美味かったよ…」

そんな事を言っていました。

…不味かったけど美味かった。

健君はそんな矛盾だらけの感想を述べていました。そして照れ臭そうに「ありがとよ」とぼそぼそと呟いていました。文句を言いながらも私のチョコレートを食べてくれていたのです。

そう、健君は冷たそうですが優しいのです。

火照った頬を両手で隠しながら足早に剛君に着いて行きます。やがてお堂の裏にある古びた物置小屋の前までやってきました。ここまで来ると人々の楽しいげな声も聞こえませんが、賑やかな祭囃子も幽かなります、白熱灯や提灯の光も殆ど届きません。薄暗くて物静かな…寂しい空間です。私達のぼそぼそと囁き合う声も厭に鮮明に聞こえてきます。やがて、いつも大声ではしゃぐ剛君も口を開かなくなりました。その代わりに私達の目の前で鎮守の森の闇が大きく口を開いています。暗くて、どこまで続いているのかも分からないような果てしない闇。まるで黒くて大きな怪物が口を開いて私達を飲み込もうとしているようでした。この先には噂通り地獄やあの世への入り口があるのでしょうか。圧倒するような暗闇に気押されてしまった私と梢ちゃんは今身を寄せ合って小動物のようにぶるぶると震えています。

ここでまた剛君がとんでもない事を言い出します。

「じゃあ、ここで二人組を決めるぞ…」

「ええっ！ 皆で行くんじゃないの！」

小さく頷く剛君。そして彼はポケットから四枚の細長い紙切れを取り出した。それがくじ引きだそうです。

「なんだよ、くじ引きかよ。どうせなら俺は剛と二人がいいな。女子といっしょになったらきゃーきゃーウルサそうだし」

健君はそう言って私の方をじろりと見る。私も負けじと健君を睨み返してやりました。すると健君にはまるで暖簾のれんに腕押しのの如くぶいと受け流されてしまいました。

「この紙の先には「○」と「×」が二枚ずつ書いてあつてな。同じ記号マークを引いた二人が組になるんだ。いいな？」

観念したように私と梢ちゃんは同時にこくりと頷く。健君ははいよ、と面倒臭そうに空返事をしました。

「じゃあ、まず梢から引けよ」

名前を呼ばれた梢ちゃんはぴくりと身を引き攣らせた。そして顔を顰めながらも恐る恐る剛君の持つくじに手を伸ばす。

「まだ見るなよ。後でせーので見せ合っただからな」

こくりと頷く梢ちゃん。

「健、次はお前だ」

殆どくじを見ずに適当に選ぶ健君。余裕の表情だ。

「最後に、千賀子。お前だ」

剛君の手に握られた二枚のくじ。その両方を私はまじまじと見比べています。剛君の握るくじに手を翳しながらなかなか選べない私。早く引けよ、と無言で催促するように訴えてくる剛君と健君のぴりぴりする視線が痛い。

私は右のくじを引きました。

どうせなら健君と組になりたい。暗くて怖い森の中でも健君と一緒になら怖くないかもしれない。それに真つ暗な森の中いそどと雖も健君と二人きりなんて、なんと素敵な局面シチュエーションなんでしょう。神様…お願いし

ます。どうか健君と組にして下さい。

そんな淡い期待を抱いて手の中にあるくじをそつと覗き込みました。私の引いていたのは…「x」の記号。正直、縁起の善くない記号です。

「よし、じゃあせーので見せ合っぞ」

私の心臓はとくとくと律動的リズミカルに伸縮しています。

せーの、と声を張り上げる剛君。

…神様！

私の目の前に現れる四枚のくじ。その刹那せつな、まるで時間が止まってしまったかのように私の思考も停止していました。私以外に「x」を持っている手。じっくり、じっくり、ゆっくりと私の視線はその手を這い上がるように顔へと上って行きました。

神様！

…ありがとうございます！

そうです、私は健君と組になれたのです。天にも昇る高揚感を抱きながら健君の顔を見ます。すると、彼とばかり目が合っていました。

どきん。

その瞬間、私の胸が一際大きな音を鳴らせます。本当に心臓が破れてしまうかと思いました。

冷淡な眼差しクール。ああ、カッコいい。

ふんっ、とお決まりのように鼻を鳴らして私から目を逸らす健君。ポケットに両手をつ突っ込んで如何いかにも淡泊な態度を取っています。

その時、剛君がこっそりと私に耳打ちしました。

「後は上手くやれよ」

「えっ？」

「脈アリだぜ」

そう言っただけで剛君は私に向かって下手糞なウインクをしました。不器用過ぎて両目とも閉じてしまっていました。しかし剛君の言いたい事は解ります、剛君は私が健君の事を好きだという事に気付いて

いたのです。そして私と健君が組になるようにくじに細工してくれていたのでしょうか。剛君はなんて善い人なんだ、と私は今猛烈に感動しています。

本当にありがとう、剛君！

そんな事より脈アリって本当？ 健君も私の事気になっているの？ いつも私に素気ない態度を取るのには照れているだけなのでしょうか。不貞腐れている健君の顔を覗き込んでもとても信じられないそれに「上手くやれよ」って言われても…。どうすれば善いのでしょうか。二人きりになったら思い切って「好きです」って言うてみる？ 言ったらどうなるの？ 更に「付き合って下さい」ってたのみ掛けてみるの？ 付き合ったらどうなるの？ やっぱり逢瀬^{デート}とかするのでしょいか。そうだとっても何処へ行くのでしょうか。夕方の公園のベンチに座って二人でお喋りとかするのでしょいか。ああ、分らない。

ああ。兎^とに角^{かく}、今は…緊張しています。

すると剛君がわざとらしく咳払いをして、私を妄想の世界から引き摺り出してくれました。

「ルールを説明するからよく聞いてるよな。先ずは俺と梢の組が出る」

その瞬間、怖がりの梢ちゃんの顔が真っ青になる。大丈夫だよ俺に任せとけて、と言って剛君は梢ちゃんの肩を抱いて快活に笑い飛ばします。すると真っ青になっていた筈の梢ちゃんの顔が今度は真っ赤になりました。

もしかして…梢ちゃんは剛君の事が…。

「これを見てくれ」

私の思案を遮るように剛君は説明を続ける。彼は右手を翳^{かざ}してその手首を左手で指し示しました。その右手首は暗闇の中で朦朧^{ぼんやり}と輝いて見えます。

「腕輪？」

お祭りの出店で買ったのでしょうか、剛君の右手首には蛍光塗料

の塗つてある玩具の腕輪がはまっていました。

「俺と梢が先に行つて、森の一番奥のお墓にこの光る腕輪を置いて来る。俺達が戻つて来たら今度は健と千賀子がこいつを取りに行くんだ。いいな？」

要するにお互いズルは出来ないという事です。私はこくりと頭をうなづ垂れます。私の横に居る健君はまた、ふんつ、と鼻で笑います。返事の代わりなのでしょう。

よし、行くぜ！ と剛君は光る右腕を振り上げて闇の中へ勇み足で進んで行きます。

「待つてよお……」

不安げな梢ちゃんもことごと剛君の後に着いて行きます。わあ！ と自らを奮い立たせながら黒い森の中へ飛び込んで行く剛君とおずおずとそれに着いて行く梢ちゃん。やがて二人の姿は暗闇に溶け込んで見えなくなり、早くも私は健君と二人きりになりました。

一番奥のお墓までは走れば五分程で着きます。しかしこのように真つ暗だと走る事も出来ません。剛君と梢ちゃんが帰つて来るのに二十分は掛かるでしょう。

その間、私は健君と二人きり。
ときどきです。

しかし、健君は私の後ろの方で物置小屋の壁に背を凭れさせて腕を組んだまま一言も口を聞いてくれません。その眼はただ暗闇の奥に向けられています。

非常に気不味い沈黙が私達を包み込んでいます。

「ね、ねえ。健君？」

私は勇気を振り絞つて声を掛けました。健君の瞳がゆつくりと私の目に向けられます。

「健君は怖くないの？」

そう尋ねると健君からはいつもの「ふんっ」が返ってきました。

「千賀子は怖いのか？」

健君は私を馬鹿にするような笑みを浮かべて訊き返してきました。

「それは…まあちよつとは…」

「あはは、お漏らしだけは勘弁してくれよな！」

「馬鹿！ 健君なんか大嫌い」

私は心にもない事を言ってしまったて少し後悔しています。本当は健君の事が大好きなのに…大嫌いだななんて…嘘。本当は好きだった！

健君は気にする様子もなくけらけらと笑っています。「やーい、お漏らし千賀子」と揶揄しながらにやにやと笑っています。私は頬を餅のように膨らまして健君を睨みつけていました。

「おい、千賀子」

健君に突然名前を呼ばれてびっくりと引き攣る私。はいつ、と思わず間抜けな返事をしてしまいました。もしかしたら背筋がぴーんと伸びきっていたかもしれません。

「お前の声ちつちえんだよ、聞こえねえ」

「そりゃ悪かったね、じゃあ大声でも出そうか？」

まさに売り言葉に買い言葉。何故、私はこんなに素直になれないのでしょうか。私の馬鹿、莫迦、バカ。

「いや、違うんだ…えつとな」

バツの悪そうな顔をして健君はこめかみをぼりぼりと掻いていきます。

「だったらどうしろって言うのよ」

「あの…そのだな…」

次、健君が零した台詞に私は吃驚びっくりしました。

「俺の横に来いよ…」

どきん。

そう言ってから私から目を逸らす健君。そんな健君から目を離せない私。ここが薄暗くて本当に善かった。きつと今、私の顔は茹で蛸のように真っ赤になってしまっている筈です。

「こ、こつち来いよ。会話にならねえだろ」

言葉尻を上げて健君が続けます。健君は相変わらず私から目を逸らしたままでいます。そんな彼に私はこくりと頷いて顔を伏せたまま健君の隣に駆け寄りました。そして私も健君と同じように物置小屋の壁に凭れ掛かります。

どきどきどき。安っぽいトタンの波板の壁を通じて私の鼓動が健君にも伝わってしまうのではないでしょうか。私の心臓、温和おとなしくしていなさい。しかしそう心の中で声を荒げる度、私の天邪鬼な鼓動は逆に激しさを増してゆくのです。

そのまま隣り合わせの無言がどれだけ続いたのでしょうか。一分が一時間のように感じられる程時間が遅く流れていました。時間の怠け者！ この気不味さを打開する為には私が思い切って口を開くしかありません。

「ねえ健君？」

何だよ、と健君も返事をしてくれました。何故か少し安心しました。

「この森の噂、知ってる？」

「ああ、何か剛の奴が言ってたなあ」

健君は相変わらず私の目を見てくれません。真っ直ぐに森の奥を見詰めているようです。私より少し背の高い健君の横顔を見上げるようにして私は続ける。

「別の世界からやってきた怪物やお化けがいるかもしれないんだよ、健君は怖くないの？」

「そんなの嘘に決まってるだろ」

「でも、もし本当だったらどうするのよ！」

「本当な訳ないじゃん」

健君は馬鹿にしたように鼻で笑った。

「もしもだよ、もしも、私がお化けや怪物に襲われたら…健君はどうする？」

私はちらりと横目に健君の顔を窺った。健君も少し逡巡しゅんしゅんしているのかじいっと無表情に前を向いています。

…俺が守つてやるよ。

もしそんな事を言われたら私は大変な事になります。きっと心臓が破裂して止めどなく鼻血を噴出しながら出血多量で死んでしまうでしょう。私の鼓動が高鳴ります。ああ、誰か私の夢想、空想、妄想を止めて下さい。私は口から心臓が飛び出そうになるのを堪えながら、健君の口唇が動きだすのをおそおそと待っています。健君はゆっくりと私の方に顔を向け、そして今までに見た事がない程の優しい頬笑みを私に見せました。

どきん。

やばい、死んじゃう…。

そして健君の口唇が静かに動く。

「じゃあ、千賀子が怪物に喰われてる間に俺は逃げるよ。はははは」期待はずれも甚だしい。危うく死にかける程に興奮していたのに、もしこれで死んでいたら死に損でした。ぽかんと間抜けな顔をしている私を見ながら健君は満足そうに笑っています。

健君の馬鹿…。

胸の中で幾度となく繰り返しました。

一頻り笑った健君は再び静かになりました。同じく私も魂が抜けたようにぼーっとしています。すると、なあ、と珍しく健君が声を掛けてきました。

「何なのよ今度は」

少し溜めてから健君。

「お前…好きな奴いるのか？」
どきん。

「な、な、な、何なのよいきなり！」

「別に何でもねえよ、ただちょっと聞いてみただけじゃん…何そんなに焦ってるんだよ、馬鹿じゃねえの」

そう言つて健君はぷいと顔を向こうに向けました。馬鹿は余計です。私は少し腹が立ちました。

「いるよ！」

私は健君から目を逸らしたまま、寧ろ目を瞑つむつてそう言い切りました、明瞭はつきりと。好きな人、それは言うまでもなく…健君の事です。そして私はゆっくりと薄眼を開けて健君の様子を窺いました。

すると健君の顔がこちらを向いていました。

「で、誰だよ。俺の知ってる奴？」

「教えな―い」

私は出来る限り憎たらしく、そしてちよつとだけ可愛らしくそう応えてやりました。どうも素直になれません。

「あつそ、別に興味ないしどうでもいいけどよ」

健君の機嫌を損ねてしまいました。これは拙い。本当に嫌われてしまったらどうしましょう。何とかして立て直さなくては、それも早急に。

「じゃあ何でそんな事聞いたのよ！」

…私の馬鹿。本当に馬鹿。

「だから、ちよつと聞いてみただけだって…ムキなるなよ」

そう言つて健君は再びぷいと私から目を逸らしました。やってしまった。私は何故素直になれないのでしょうか。もう思い切つて聞いてみるしかありません。

「じゃあ…健君はいるの？好きな人…」

その刹那健君は、えっ、と洩らして私の方を見ました。私の目と健君の目、ぴつたりと視線が交錯しています。これはこれで時間の流れが遅い。時間の怠け者！

「何でそんな事聞くんだよ」

「だって健君も聞いたでしょ、私も答えたじゃん！」

もごもごと口籠る健君。いつも自信満々で堂々としている冷淡クールな健君のこんな姿を初めて見ました。そして健君は小さく頷きました。

…え、好きな人いるんだ。

「私の知ってる人？」

「教えねえよ…」

とうとう健君は私に背を向けてしまいました。彼の背中全体から動揺が滲みだしているようです。

がさがさがさ。

草を？き分ける音。ひゃつ、と短い悲鳴を上げる私。その音は真つ暗な森の方から聞こえてきます。私と健君はほぼ同時に森の方に目を遣りました。すると聞き覚えのある声が聞こえてきます。

「ただいまー、うへえ…やっぱ怖かったぜえ！」

夜の四十万を切り裂くような騒がしい程に快活なこの声は。私は暗闇の奥にじいっと目を向けました。真つ暗な森の中から剛君と梢ちゃんの姿が現れました。剛君の腕には光る腕輪がありません。どうやら約束通り、お墓に置いてきたのでしょうか。それにしても梢ちゃんったら…大胆です！剛君の腕に確りとしがみ付いているのです。傍から見ると、まるで彼氏と彼女、恋人同士のような感じではないですか。見ているこちらが恥ずかしい。

「おいおい、随分仲がヨロシイようで…お二人さん」

健君が茶化すと梢ちゃんは弾かれたように剛君から離れました。その様子を見ていた健君は実に愉快そうに笑っています。温和（おとな）しそうに見えて梢ちゃんも意外と大胆なようです。素直になれない私とは大違い。尊敬の眼差しで梢ちゃんを眺めていました。すると梢ちゃんは眉を吊り上げて私を睨みつけてきました。

「ひどいよ千賀子ちゃん！」

「え、何が？」

私は目を白黒させて梢ちゃんを見えています。私が何をしようというのでしょうか。すると剛君まで、

「千賀子、あれは確かに反則だぜ…」

と、眉を顰（ひそ）めています。いったい私が何をしようのでしょうか。梢ちゃんは更に訳の分からない事を続けます。

「私達の後に着いて来たでしょ？」

「そんな事してないよ！」

怪訝けげんそうに私の顔を睨む梢ちゃんと、そして剛君。二人はいつた
い何を言っているのでしょうか。すると健君がすかさず弁解してく
れました。

「千賀子はずっと俺と一緒にここで待ってたぞ。お前ら何言っ
てんだ？」

「でも俺達確かに見たぜ！　なあ」

剛君が梢ちゃんに同意を求める。すると梢ちゃんもこくりと頷き
ました。

「俺は見たんだ。木の陰から千賀子が俺達の事をじいつと視てた
んだ。あれは千賀子だよ、間違いない！」

剛君が嘘を吐いている様子はありません。彼は嘘が下手糞なので
顔を見ればそれが嘘かどうかなど直ぐに分かります。しかし剛君の
顔は真剣そのものでした。

「でも…私は…ずっとここに居たよ」

「嘘でしょ…」

梢ちゃんは今にも泣き出しそうな顔でそう言いました。二人はみ
るみるうちに青褪めてゆき、ぞつと身を震わせていました。私はも
つとぞつとしています、何故なら今からそんな森に這入ってゆかな
ければならないのですから。

私が陰から覗いていた？　そんな筈は絶対にありません。私は間
違いなく健君とずつとここに居たのです。

生温い真夏の夜風の舌先が私の頬を舐めてゆきました。

大きく開いた森の闇。

まるで恐ろしい怪物が大きな口を開いているようです。そんな中に
私と健君は意を決して飛び込みました。賑やかで楽しげなお祭囃子
も森の中までは全く聞こえてきません。聞こえる音と言えは鈴虫の
鳴声、時折ざわざわと風に揺れる木々の音、そして私と健君のあしおと足音
らしいものです。本当に森閑として静かなものです。

足を踏み出す度に雨水を吸った落ち葉がじゅうと湿り気を孕んだ音を立てます。そんなぬかるんだ道なき道を歩いていると、湿った土の匂いも気になってきました。真夏だというのに…少し寒い。こんな心細い森の中で頼りになるのは健君だけです。しかし健君は何も喋ってくれません。今、私の耳に入るのは落ち葉を踏みしめる私達の跽だけ。静寂と沈黙に耐えきれなくなった私は思わず口を開きました。

「健君…」

何だよ、と無愛想な返事が直ぐに返ってきました。確かに無愛想でしたが私はとても安心しました。

「怖くないの？」

「別に…子供じゃないんだから」

…子供のくせに。

こんな時でも私を馬鹿にしてくる健君の顔を睨みつけてやりました。すると健君が続けて質してきます。

「千賀子は怖いのかよ」

「そりゃあ、まあ…ちよつとは…」

ふんつ、と嘲るような健君の声。

「漏らすなよ」

「漏らさないよ、馬鹿！」

愉快そうににやける健君。健君は私の反応をいちいち愉しんでいるようです。少し腹が立ったので話題を変えようと思いました。

「剛君と梢ちゃん、あの二人どう思う？ 梢ちゃんってやっぱり剛君の事…好きなのかな…」

恐らく梢ちゃんのあの潤んだ瞳は恋する乙女のもです。多分そうなのではないかと、私になりそう推測していました。すると間髪入れずに健君の、ふんつ、が返ってきました。

「そんなのいつも見てれば誰だって分かるだろ。バレバレだよ」

本当に千賀子は鈍いなあ、健君はそう結びました。呆れたような顔をして私を見降ろしている健君は徹底的に私を馬鹿にしたいよう

です。そんな罵言に私のこめかみの血管がぴくりと浮き立つ。健君は私の事を鈍いと馬鹿にするけれど…一番鈍いのは健君です。それとも健君は…私の気持ちを知っているのでしょうか。

落ち葉を踏みしめながら真つ暗な森の中を暫く歩いていました。不意に健君の目つきが鋭くなりました。いったいどうしたのでしょうか。

「千賀子…止まれ」

私の胸の前に健君の手が横からすうつと伸びてきました。「どうしたの？」

私は立ち止まり健君の顔を見上げました。この暗闇の中では近くに居る筈の健君の顔も朧おぼろにしか見えません。しかし彼の顔からは先程までの冗談めいた色が消えていました。精悍な顔つきになった健君は確りと闇の先を見据えながらも忙しげに辺りに視線を配らせています。

やっぱり変だ…、そしてそう呟く健君。

「俺達以外にも…誰かいるぞ…」

「え、ウソ！」

真剣な眼差しの健君の頬を一筋の汗が流れ落ちた。ごくりと生唾を飲み込む私。ふと私の脳裡のうりに梢ちゃん達の言っていた事が過ります。

…木の陰から誰かが見ていた。

彼女達は私が見ていたのだろうと言っていましたでしたがそれは絶対に違います。私はそんな事していませんし、何より今私はここに居ます。この森にはいったい何が居ると言うのでしょうか。鬼か悪魔か化け物か妖怪か。それとも…幽霊か。南極の氷が私の背中をつつと滑り落ちていったようにぞくりと寒気を覚えました。正直言つて、怖いのです。

「俺達が完全に立ち止まった後も足音が聞こえたんだ。もしかすると俺達…追っけられてるのかもしれない…」

私は気が付くと健君のシャツの裾をぎゅうと握り締めていました。健君はそれに気付いているのかいないのかは解りませんが私の手を掃う事もなく暗闇と睨めっこをしています。おどおとしながらも私も健君に倣^{なら}って闇の中に視線を泳がせますが暫く暗い中に居た所為で幸か不幸か闇に目が慣れてしまい、目を凝らすと闇の奥が朦朧^{ぼんやり}と視えてしまうのです。そして私は視てしまいました。かさかさかさ。

奥の方の木の陰に誰かが隠れた。

「け、健君！」

悲鳴に近い上擦った声を上げて私は健君の服を引っ張ります。

「何だよ」

私を宥^{なだ}めるかのような健君の冷静な反応。私は怖々と闇の先にある例の木の幹をゆっくりと指差しました。その指先は言うまでもなく、震えています。

「今、あそこに誰かが…」

健君も私の指し示す方に目を向けます。

「何もいないじゃん」

「でも確かに…」

すると私の言葉を遮るように健君が続けます。

「やっぱ俺の考え過ぎかな…足音つても気の所為なのかもしれないし、もし本当の足音だったとしてもきつと犬かなんかだろうな…怖いと思うから怖いんだよ」

そう言って一人で納得した様子の健君は歩き始めました。健君は妖しいものは何もないと踏んだようです。しかし、私は確かに視たのです。あれは決して健君が言うように犬や猫なんかではありませんせん。

そう、私は視ました。

ゆらりと木の陰に隠れる…紅い影を。

「おい、早く行くぞ。お漏らし千賀子」

「漏らしてない！」

真つ暗闇の中を健君に一步遅れて歩き続ける事、暫く。随分と目も慣れてきた頃でしょうか。夜空を覆う木々の枝の隙間から時折覗く銀色の月さえも眩しく感じるようになってきました。

目の前に現れた光景に思わず足が止まります。

「ほら、着いたぞ」

健君は至って冷静。

「え、あ…うん…」

私は打って変わって動揺。

何だよビビってんのかよ、と私の顔を覗き込む健君。強がって顎を横に振る私。しかし本当は凄く怖いんです。何故なら目の前にあるもの（、）は洒落にならないぐらい鬼魅^{きみ}が悪いのですから。

「じゃあ何で顔伏せてるんだ？」

こうして健君はまた私を苛める。本当に意地悪。にやにやしながら健君は顎をしゃくって前にあるもの（、）を示します。

「ほら…」

健君は私の顎を指でくいと押し上げました。

どきん。

一瞬、心臓が爆発するかと思いました。実はその時、恥ずかしながら私は変な期待をしてしまいました。だって、そんな…顎を指で…「くいっ」だなんて。そんなの…初^{はつ}な私だって幾らなんでも解ります。それは…もう…あの、その。

ち。

ち、ち、ち、ち、ちゅう…ちゅうされると思うじゃないですか。

私は咄嗟に目を閉じました。もう、トーストの上のチーズのように蕩^{とろ}けそうです。

ときめいた私が馬鹿でした。
ぺちん。

額を叩かれる感覚と共に健君の声。

「前見るよ」

恐る恐る目を開いた私の前にあったのは健君の顔。ではなく。そこにあつたもの（、）は闇に佇むお墓、お墓、お墓。

…最悪です。

そうです。折り返し地点のお墓に着いたのです。暗い森の中に五つばかりのお墓が並んでいて、いつ妖怪や幽霊が出て来てても訝（おか）しくないような雰囲気です。墓石に刻まれた文字も非道く朽ちてしまつていて暗い中では読む事も儘（まま）なりません。その脇に立てられている卒塔婆（そとば）も長い間、風雨に晒され続けた所為なのか黒く変色してしまつています。勿論、線香も供えられた跡もありませんし、萎れて更にぱりぱりに朽ち果てた仏花が両脇に果敢なげに佇んでいます。これらのお墓は所謂、無縁仏と呼ばれるもののなのでしょう。兎に角、怖過ぎます。

「あつたぞ」

不気味に聳（そび）える墓石の前に健君が声を上げます。

「剛達、本当に来てたんだな。これだけ暗くて不気味だから、てつきり途中で逃げ出したんだと疑つてただけだな」

一番手前にある墓石の供物台に朦朧（ぼんやり）と光を放つ何かが置いてあります。それは真つ暗な森の中で頑（かたく）な存在を主張しているようでもあります。ここに在るのだと。薄朦朧（うすぼんやり）と闇に浮かび上がる輪っか。

私にも見覚えがあります。そう。剛君が置いて行つた例の光る腕輪です。それを持って帰れば私たちの小さな冒険も終わりです。私は表情を綻ばせて健君の顔を見上げます。すると健君は意味有り気に微笑んで私を見降ろしていました。厭な予感しかしません。

「千賀子、お前が取つて来いよ」

ほら、また私を苛める。

「真剣（マシ）？」

「本当（マシ）」

そう言つて健君は私の背中をぽんと叩きます。

…最悪です。

俺がちゃんと見といてやるからやってみろよ、と健君に促されて私は渋々頸を縦に振りました。そして私はゆっくりと墓石ににじり寄って行きます。

…怖い、足が震える。

忍者のような摺り足で漸く例の墓石の前に立ちました。そして顔を背けながら目を確りと瞑ってそろりそろりと腕輪に手を伸ばしました。ぴんと伸ばした中指の先が腕輪に触れた。

あつた！

腕輪を摘み取ろうとした時、伸ばした右手の手首が冷たい感覚に包まれたのです。まるで誰かに掴まれているような。ひい、と小さい悲鳴を上げる私。しかしもう私は騙されません。きつとまた健くんの悪戯です。

「健君、好い加減にしてよ！」

後ろを振り返り、目を開く私。

「へ、何だよ？」

遙か後方でぽかんと口を開けている健君。健君との距離は歩数にして凡そ五歩。私に手が届く筈がない。

恐る恐る自分の手元に視線を移動させてゆく。腕輪に伸ばした私の右手首は何者かの手に確りと掴まれていました。

ごくり。

私の中で時間が止まる。音が消える。それは血の気のない真つ白な手。その冷たい手は墓石の裏側から伸びて来ていました。細くて白いその腕の上に視線を這わせて行きます。

真つ赤な浴衣の袖。

そして、墓石の裏から覗く真つ白な顔。

…じいつと私を凝視（みつめ）る見開かれた真ん円い瞳。

「ぎやあああああああ」

ばさばさと鳥が羽ばたき飛び去る音。私は未だ嘗てない程の悲鳴と言つか絶叫を上げて後ろに仰け反り、尻餅をついてしまいました。

その刹那、私の手首を掴んでいた手もしゆるしゆると引つ込んで真っ白な顔と一緒に墓石の裏に消えてしまいました。

「どうした!」

健君が駆け寄って来てくれます。そして私の肩を後ろから揺さ振ります。

「お、お、お、お化け!」

私は目を剥いて墓石の方を指差していました。

「お化けだつて?」

こくりこくりこくりこくり。

「本当か?」

こくりこくり。

「見間違えじゃないのか…」
ぶるんぶるん。

「お化けなんている訳ないじゃん…誰だよ出て来いよ!」

…健君、何て事言うのよ!

健君は墓石に向かって怒鳴ります。本当にお化けが出て来たらどうしよう。すると本当に墓石の裏から音も無く…すう、と、今見た真っ白な顔が再び…。私は恐怖に慄き、^{おのの}がたがたと震えています。健君はそんな私の肩を確りと抱き留めてくれました。

白い顔の主はゆっくりと墓石の裏から出て来て、その姿を露わにします。お化けが出て来たらどうしようという一抹の不安を抱えていたら…。

^{いちまつ}市松人形が出て来ました。

「お前は何者だ!」

暗闇の中でも映える真っ赤な浴衣、生白い素肌。市松人形は怯えるような仕草で胸の前に手を置きながら^{どんぐり}団栗のような円い瞳で私達を覗き込んでいます。

女の子? しかも私達よりもずっと小さい。

健君に怒鳴りつけられて今にも泣き出しそうな市松人形、のような女の子。私が彼女を恐れているのと同じくらいきつと彼女も私達

を怖がっているのでしょう。そう思うと不思議とそれ程その女の子の事を怖いとは思わなくなりました。

市松人形はそわそわと、そしておずおずと、再び墓石の裏に身を隠そうとしました。

「待って！」

思い切って私がそう言うのと少女の体がぴくりと痙攣して、ぴたりと動きを止めました。そして怯えた小動物のような瞳で私をじっと凝視^{みつめ}ています。よく見ると彼女の口唇はふるふると震えているのです。

「大丈夫…何もしないから…出ておいで…」

私は電柱の陰に隠れた猫を呼ぶように市松人形を諭しました。すると少女の顔から幽かながら不安の色が消えたように見えました。何言ってるんだ、と私の肩を揺すり諫める健君。静かな森の中では彼女のすうすうという小さな息遣いまで聞こえてきます。

「ほら、大丈夫だから」

すると市松人形はゆっくりとこちらを向きました。彼女は恥ずかしそうに口元に手を遣って視線を下に落としています。

「君はこんな所で何してるの？」

市松人形は不思議そうに首を、かくん、と傾げました。まるで梟^{ふくろう}のようです。その仕草が妙に愛らしくて私は思わず表情を緩めてしまいました。

「一人で来たの？」

かくん。

「お父さんとお母さんは？」

かくん。

「何年生？」

かくん。

その妙な遣り取りを見ていた健君も漸く警戒を解いたらしく、私の肩を握る手を離しました。少し…がっかり。

「あはは、何だよこいつ、変な奴。ビビり具合と言い何と言い、ま

るで千賀子みたいな奴だなあ！」

そう言つて愉快そうに笑う健君はすくりと立ち上がります。続いて私も立ち上がりました。すると背の低い市松人形はじいつと私達を見上げています。そんな市松人形もよく見れば可愛い女の子です。しかしこの森は…悪魔や妖怪、そして幽霊が出るという曰くつきの場所。森の奥に別の世界との穴があつてそこから怖いお化けや怪物、魑魅魍魎ちみもうりょうの類がわんさか這い出てくるとの噂がある森なのです。

一見こんな可愛い子も…もしかすると。

否、そんな筈はありません。そんな筈はないのですが…。私は勇気を出して聞いてみる事にしました。彼女の前にしゃがみこんで団栗のような瞳を確りと見据えます。

「あなたは誰なの？」

かくん。

「悪魔？」

かくん。

「妖怪？」

かくん。

困った顔をする市松人形。私はぐくりと唾を飲み込みます。私には悪魔や妖怪よりもずっと苦手なものがあつたのです。もしこの少女の正体がそれだとしたら…流石にちよつと怖くなります。私は大きく深呼吸をして、じゃあ、と続けます。

「…幽霊？」

市松人形の動きがぴたりと止まります。まるで本物の市松人形のようになつてしまいました。

…え、ちよつと。本当に幽霊なの？

そして市松人形はよりいっそう困った顔になりました。何故この質問だけこんなに反応が遅いのでしょうか。すると…。

かくん。

少女は今までと同じように頸を傾げました。私は内心ほつと胸を撫

で下ろしました。まあ、この「かくん」が肯定なのか否定なのかも解らないのですが。

「じゃあ私達と同じ、人間なのね？」

相変わらずの、かくん。どうやらこの仕草はあまりあてにはならないようです。自然と私も困った顔になってしまいました。

「ところで、君のお名前は？」

人間なら名前がある筈です。まあ魑魅魍魎の類でも名前ぐらいはあるかもしれませんがね…。すると市松人形はもじもじと鼻を掻きながら足元の落ち葉をがさがさと蹴っています。もしかして照れているのでしょうか。暫く私が待っていると、少女はゆっくり顔を上げました。そして。

ーかごめ

そんな音が聞こえました。深閑とした森に響いたか細い声、舌足らずのもごもごとした声。目の前に居る少女のものなのでしょう。

「かごめ？」

ぴくりと身を引き攣らせる市松人形。

「君はかごめちゃんっていうの？」

ふるふる震えてこくりと頷く市松人形。彼女にはかごめという名前があるのだそうです。豪く古風な名前だなと思いました。すると訝^{いぶか}しげな顔をした健君が私に耳打ちしてきます。

「この子、おかしくないか？」

「何が？ 確かに可笑^{おか}しな子だけど…」

「違う。怪訝^{おか}しいって事だよ」

かごめちゃんは難しい顔をして小さな手で一生懸命に小さな顔を拭っています。墓石の裏に顔を付けていたので鼻に泥でも付いていたでしょう。まるで子猫のように愛くるしい仕草です。

「だってお前、こんな子見た事あるか？」

「ないけど」

「だったら怪訝しいだろ。俺達の学校にもこんな子いないし、公園でも空地でも近所の駄菓子屋でも見た事ないぜ。解るだろ、つまり

この町の子供じゃないんだ。こんな小さな子供が一人で違う町の祭りなんかに来るのかよ？ 況^ましてやこんな森の奥に」

そう言われてみれば…私達の住んでいる小さな町では見かけない顔です。この町の子なら中学生から幼稚園児までみんな私の友達です。しかしかごめちゃんは…知りません。健君は化け物でも見るような目でかごめちゃんを睨みつけています。

「きつと最近引越してきた子なんじゃない？」

「そうかなあ」

「それか、お祖母ちゃんの家^{うち}に家族で来てるのか？」

「それで夏祭りに一人でか？」

…確かに一人ではあり得ない。

「ねえ、かごめちゃん。誰かと一緒に来たのかく^ん。」

駄目だこりゃ…。健君も呆れ顔で溜め息を吐きます。そして健君は痺れを切らしたように乱暴な口調で、

「おい、お前どこから来たんだよ！」

と吐き捨てました。するとかごめちゃんは怯えたように震えて顔を伏せました。ちよつと今日の健君は乱暴過ぎます。もしかして健君は…怖いのでしょうか。うふふ。

興奮する健君を宥めて、私はかごめちゃんに謝りながら柔らかに同じ事を質しました。

「かごめちゃんは、その、どこから来たの？」

泥塗^{どろまみ}れの手で顔を拭^{ぬぐ}った所為でかごめちゃんの顔は余計に汚れてしまっています。かごめちゃんは眉間に皺を寄せて、泥だらけの顔を難しそうに歪めて考えているようです。どこか微笑ましい姿です。そしてかごめちゃんの細くて真つ白な指が徐^{おもむろ}に動きます。湿った空気をゆつくりと切り裂くように移動する指先。その人差し指が示した先は…。身の毛が弥^{よた}立ちました。

「本当に言ってるのか？」

健君の問いにこくりと頷くかごめちゃん。

「嘘でしょ…」

彼女が指差した先は…

…お墓。

否、違う。もつと後ろ。

お墓よりもずっと後ろにある、徒^{ただ}の闇。かごめちゃんは夜の中でも格段に黒い、夜を凝縮したような漆黒の空間の先を指し示していたのでした。その先にあるのは徒の闇、それ以外に何もありません。もし仮に何かがあるのだとすれば異界の入り口。かごめちゃんもそこから来たのだとしたら…かごめちゃんは…。

妖怪？ お化け？ それとも幽霊？

確りと私を見据える硝子玉のように無機質なかごめちゃんの瞳。

私は彼女に腕を掴まれた時以上の戦慄を覚えました。そして初めてかごめちゃんは…薄く笑ったのです。

につこりと。

がさがさがさ。

落ち葉を掻き分けて歩く音。

「なあ千賀子？」

不意に健君が私に声を掛けてきました。

どきん。

とても優しい声。そんな声色で健君に名前を呼ばれると心臓が爆発してしまいそうになってしまいます。私の胸はほんわかと温かくなりました。そして私も少し優しく甘ったるく…。そして精一杯、嬌^{セウ}艶^{エン}に…。

「なあに、健君…」

小学生にしては完璧な程に悩ましげな声でした。これならきっと健君もどきんとなる筈です。そして健君の顔がこちらを向く…。

「何だよ、気持ちわりい…」

ああ無情。レ・ミゼラブル

健君には私の渾身の嬌艶光線セクシービームも通用しません。しかも私の頑張りを「気持ちわりい」の一言で片付けるとは…非道い。

「腕輪。ちゃんと持ってるか？」

持つてるよ持つてますよ、と返す私。剛君がお墓に置いていった

光る腕輪を着けて真つ暗な森を戻る私、そして健君。

「何怒ってるんだよ」

「怒ってないよ！」

「あつそう、変なヤツ」

しれつとした顔でそう言い捨てる健君は本当に鈍い人です。

がさがさがさ。

落ち葉を掻き分けて歩く音。私と、健君と、もう一つ。三人目の
跽…。あしおと

私が後ろを振り返ると小さな紅い影がするりと木陰に隠れます。

そして前を向いて歩き出すとその跽も再び聞こえてくるのです。すると健君は険しい顔で言います。

「あいつ、着いて来てるな」

「うん…そうみたい」

そう、跽の主は…かごめちゃんです。彼女はあのお墓の所からずっと私達の後を着いて来るのです。目的は解りません。ただ私達の背中のかごめちゃんにじいつと見られているのです。いったい何のつもりなのでしょう。はつきり言って…鬼魅きみが悪い。

まさか彼女は私達を別の世界へ引き摺り込もうとしているのでしょうか。そしてその期を虎視眈々と窺っているのだとしたら。そう考えただけでも慄ぞつとします。堪り兼ねた健君は後ろを振り向いて怒鳴りました。

「いったい何のつもりなんだよ！ 用があるなら出て来い！」

しかしかごめちゃんは何も答えずに紅い残像を残して岩陰に隠れます。苛立を顔全体に浮かべながら暗闇の先を睨む健君。きつと健君もかごめちゃんを牽制した訳ではないのでしょうか。何を言われる

でもなく、何をされるでもなく。ただ視られているだけの無言の重^{プレッ}圧。健君もそれに押し潰されそうに耐えきれなくなつて苦し紛れに叫んだのでしよう、のしかかる重圧を振り払うように。しかしそれも糠^{ぬか}に釘。かごめちゃんには健君の怒声を無視するかのように岩陰から出て来ません。

暫く岩を見続けていると、様子を窺うように白い顔がそろりと覗きますが私達と目が合うなりまた岩陰に隠れてしまします。

「ケツ、気持ち悪い奴…」

そう吐き捨てて、据わりの悪そうに前へ向き直り、歩を進める健君。私もそれに着いて行きます。

がさがさがさ。

背後からは三人目の聲。市松人形も着いてきます。どれ程、暗い森の中を歩いた事でしょうか。生温く、それでいて厭に湿った空気で森の中は満たされているようです。私の躰も滲む汗と不快な湿気の所為でじつとりと湿っています。べったりと背中中に張り付くシャツが気持ち悪い。べったりと額に張り付く前髪はもつと気持ち悪い。私の中で妙な疑問が芽生えます。

「変だな…」

そう健くんの言う通り、変なのです。帰り道が厭に長い。私達はもうとつくにお堂の裏に戻っていてもおかしくないくらい歩いていきます。それでも漆黒の森は一向に切れ間を見せないのです。

「もしかして…迷ったのかな」

「そんな筈はない。だって来た道と同じように真っ直ぐ歩いてるんだぞ」

確かにそうです。その筈です。私達は来た道をそのまま戻っています。それでも何か違うような気がしてなりません。このまま帰れなくなつたらどうしよう。そんな怖い事が脳裡を過り、身震いがしました。私は不安の雲を振り払うかのように頭をぶるぶると振りま

す。

一定距離を保って背後から聞こえる聲に意識が傾く。

まさか…かごめちゃんが。矢張りかごめちゃんが私達を迷わせ、別の世界に誘^{いざな}っているのではないでしょうか。眉間に皺を寄せて健君がふと立ち止まる。

「やっぱり変だ…」

「え…」

「来る時はこんな大きな木なんてなかっただろ？」

健君は目の前に現れた大木の幹をばんぽんと敲く。はつきりしい相槌を打って私はその大木を見上げて、その鬼魅の悪さに圧倒されてしまいました。

私が五人居ても腕を回せないぐらいの太い幹、朽ち果てた注連縄^{しめなわ}、苦痛に歪んだ人間の顔のような瘤^{こぶ}、大きく手を開いて私達の魂を掴み取ろうとしているような枝、枝、枝。完全に星空を覆い隠さんとするその姿。まるで大きなお化けに見下ろされているような錯覚を感じます。この木は何十年、否、何百年もここに立っているのでしょうか。根元に視線を下ろすと大きな洞^{うろ}が出来ていました。子供が入れる程の大きな穴、その先は真の闇。まるで暗黒の世界への入り口のように思えます。きつと…這入ったら戻って来られない。こんな不気味で印象的な大木を一度でも見ていれば、いくら忘れっぽい私でも必ず覚えていた筈です。しかしこんな初めて見ました。私の胸にじわじわと恐怖が浸食し始めます。私は助けを求めるようにゆっくりと健君の顔に目を向けました。すると健君はしっかりと歯を食い縛ってお化けのような大木を見上げています。

その顔には明らかな不安の色が窺えました。頼みの綱の健君のそんな表情を見て、私は愈々（いよいよ）泣き出しそうになりました。考えなくなかったので今まで考えませんでした、もう間違いないかもしれません…。私達は森の中で迷子になってしまった。お家へ帰りた…。仄かな絶望を感じながら顔を伏せました。すると根元の洞の中で素早い何かが動きました。何だろう、野良犬か野良猫でも住んでいるのでしょうか。それとも虫でしょうか、気持ち悪い虫だったら…厭です。

がさがさがさ。

洞から出てきたのは…白い顔。

あまりの驚動に呼吸が止まり悲鳴すら出ませんでした。流石の健君も、うわあ、と声を洩らしながら後ずさってしまいました。

そうです。かごめちゃんです。芋虫のようにぼそもぞと軀をくねらせて洞から出て来るかごめちゃん。折角の綺麗な浴衣も泥だらけです。

「お、お前！ 何なんだよ！」

悲鳴の序でに健君は叫びました。それに驚いて再び隠れようとするかごめちゃんを呼び止める私。

「待って、ごめんね。もう怒鳴ったりしないから怖くないよ…」

怖くないよ、か。本当は怖がつているのは私の方です。私は矢張りかごめちゃんの事が未だ少し怖いのです。

かごめちゃんはぴたりと動きを止めました。そしてその小さな指で私のシャツの裾を摘まんで、くいくいと引つ張ります。何か伝えたいのでしょうか。

「どうしたの？」

相変わらず団栗のような瞳で私を凝視みつめしていたかと思うと、かごめちゃんはすたすたと暗闇の奥へ駆け出しました。そしてぴたりと立ち止まり、ゆつくりと私達を振り返ります。

「何だよ、あいつ…」

私達を見据えたままかごめちゃんは動きません。私が一步二歩とかごめちゃんに近寄ろうとするとかごめちゃんも一步二歩と前に進み、私が立ち止まるとかごめちゃんも立ち止まってくるりとこちらを振り返ります。

「もしかして…着いて来いつて事？」

こくり。

かごめちゃんが目を逸らさず上目遣いに頷きました。

「冗談じゃない…やめといた方がいいぞ」

健君は完全にかごめちゃんを疑っています。健君の言う通りです。

私達はかごめちゃんの事を何も知りません、彼女が森の出口を本当に知っているのかどうかは極めて怪しい話です。それにかごめちゃんには私達を別の世界に連れて行こうとしている幽霊なのかもしれないのですから。確かに健君の言う事は尤もです。確かにその通りなのですが…。

「行ってみようよ…」

「おい、お前正気か？ 絶対怪しいだろ」

よりいっそう深く眉間に皺を刻む健君。当然の反応です。

「でも、私達も道が判らなくなっちゃったでしょ。このまま迷っていても埒が明かないし、駄目で元々であの子に着いて行ってみない？」

「知らねえぞ…」

ふん、と鼻を鳴らしながらも健君は頸を縦に振りました。こうして私達はかごめちゃんに道案内をお願いする事にしました。さて、鬼が出るか蛇が出るか。極力何も出て欲しくはないのですが…。私と健君との冒険はもう少しだけ続きます。

私達が着いて来るのを振り返ったかごめちゃんは再び血の通っていないような白い頬を幽かに緩めて…薄く笑いました。

行きしなには絶対に通っていない道。

明らかに木の密度も増しています。鬱蒼と茂る木々の枝を払い除けながら私達はただ只管歩いています。水の流れる音も聞こえます。確か神社の近くを小さな沢が流れていました。その沢はこの森の方から続いていて、健君の考えではその沢を見つけて下流の方へ辿って行けば外へ出られるのではないか、との事でした。それにしてもかごめちゃんの選ぶ険しい道は寧ろ道ではありません。強いて言うなら獣道。熊でも出てきそうです。

「本当にこっちで合ってるのかよ！」

かごめちゃんは真っ黒な髪を揺らしてこくりと頷きます。そして

彼女は月明かりさえ届かない真つ暗な森の中を迷う事無くすいすいと進む。しかし私にはそれが森の深くへ、深くへと進んでいるように思えてならないのです。本当に森の外へ向かっているのでしょうか。それとも…。

水の音がさらさらと徐々に明瞭^{はつきり}とした輪郭を帯びてきました。音の出所は見えませんが確かに流れがあるのでしょ。沢が近い所為か地面の起伏が激しくなり、おまけに土もぬかるんでいます。先程までと比べると視界は少し開けてきましたが、歩き難い…。ぬるぬるとした足場、気持ち悪い。

ふと健君が小声で話しかけてきました。

「なあ千賀子、あの子が本当にお化けだと思つか？」

あまり健君らしくない質問です。

「どうだろう…お化けじゃないんじゃないかな。ほら、足だってあるし」

よく見るとかごめちゃんの足元も、真つ赤な浴衣の裾もどろどろです。そうは言っても正直、私も彼女がお化けかどうかは半信半疑です。こんな森の中に女の子が一人でいるなんて矢張りどう考えてもおかしい。

「このままあの子に知らない世界に連れて行かれたら…」

「どうしたの健君、まさか怖いのか？」

ふんっ、が返って来ました。

「馬鹿、お前を怖がらせようとしただけだよ！」

「何それ…でも、もしかごめちゃんが幽霊やお化けだとしてもそんな事するような悪い子じゃないと思うよ」

証拠は？ と私にふてぶてしく質す健君。

「ないよ。でもかごめちゃんはその子じゃないよ、きっと」

全くお前はお人好しだなあ、と健君は呆れたように溜め息を吐きます。私は少し自嘲気味に笑いました。

程なくして…善くない事が起こりました。余所見をして少しばかり気を抜いていたのが間違いでした。

足元を這う木の根。私はそれに足を取られてしまいます。そして私の躰は一瞬自由を奪われ、そのまま地面に叩きつけられました。べちゃ。

ぬるぬるした土と、ごつごつした石の感触を同時に味わいました。「何やってんだよ……」

うつ伏せに倒れたまま前を見ると健君とかごめちゃんが私を振り返っています。痛いのですがあまりの恥ずかしさに私は苦笑いを浮かべます。

「やつちゃった……あはは……」

すると、健君の表情から笑みが失せる……何かおかしい。みるみるうちに健君の顔から血の気が失せていきます。

どうしたの……。そう尋ねながら上体を起こす私。健君は目を剥いて私を見ています。健君の様子が何か変です。

「どうしたのって……千賀子……お前……」

恐る恐る健君は指を私に向けます。

「あ、足……」

「足がどうかした？」

私は立ち上がるうとしました。しかしその瞬間、右足の脹脛はふのひざねに刺し貫かれるような激痛が走ったのです。あまりに痛くて立つことすら出来ません。私はゆっくりと痛みのする足に目を遣りました。すると私の足は大変な事になっていました。

折れた枝が足に突き刺さっているのです。

「動くな千賀子！」

健君が血相を変えて駆け寄って来ます。その傷口を見ているとじわじわと満ちる潮のように激痛が押し寄せて来て何だか怖くなってきました。

痛い、痛い、痛い。怖いよ、畏こわいよ、懼こわいよ、慄こわいよ……。恐いよ！鉛筆程の太さがあるその枝は深々と私の足に食い込んでいます。

信じられない光景に私の頭は真っ白になります。千賀子、千賀子と私の名前を呼ぶ健君の声。それもどこか遠くで聞こえるような気さ

えしてきました。

私の頭の真っ白になった部分に次々と恐怖が書き足されてゆきます。

…痛い。どうしよう。

…痛いよ。どうすればいいの。

私は足から生えているかのように突き刺さっている枝を握りました。

…これよ。これを何とかしないと。

「よせ！」

気が動転していた私は健君の制止も聞かず、力任せに枝を引き抜きました。

ずるり。

私の体内をごとごとした異物が通り抜ける音。そして襲いかかる耐え難い痛み。

「痛っ！」

思わず声を洩らしました。更に痛みは増し、まるで右足全体が熱湯に晒されているかのようになりました。引き抜いた枝の先には真っ赤な血。そして私の脹脛に開いた穴からも、どくどくと鮮血が溢れ出しています。傷口を押さえる私の手が、シャツが、みるみる内に蘇芳色に染まってゆきます。

…血。

…血だ。

…どうしよう。怖い。

「馬鹿、そんな事すると余計に痛いし黴菌ばいきんも入りやすくなるんだよ！」

「ごめん…ごめんなさい！ 痛い、痛いよ！」

「俺に謝ってどうする…馬鹿！」

こんな時でも健君は私にお説教です。いつも冷静な健君も真っ赤な血を見て少し落ち着きを失っているようでした。離れた所でおろおろと狼狽うろたえるかごめちゃん。そして健君はかごめちゃんをきつく睨みつけます。

「お前の所為だ！」

かごめちゃんの小さな体が痙攣しました。

「大体お前がこんな所に連れて来たからいけないんだ！ お前の所為で千賀子は…」

ふるふると震えるかごめちゃん。

「健君…」

…違うよ…かごめちゃんは悪くない。

「俺達をどこかへ連れて行くつもりだったんだろ…あの世か？ 地獄か？ ええ！ どうなんだよ！」

健君は堰を切ったようにかごめちゃんに怒鳴ります。迷った事、私が怪我をした事、総てをかごめちゃんにぶつけているようです。何も分からないまま徒怒鳴りつけられているかごめちゃんは今にも泣き出しそうです。そして健君は止めを刺すように冷たく吐き捨てました。

「お前なんかどっか行っちゃえ化け物め！」

かごめちゃんの目からほろりと涙が零れました。彼女は泥だらけの浴衣の袖で涙を拭って寂しげに背を向けます。すすん、と涙を啜る声と小さな嗚咽。かごめちゃんの肩がひくひくと震えています。かごめちゃんは悲しげにこちらを一瞥してから森の奥へと走り出しました。

「かごめちゃん！」

私が彼女の名前を叫んでも彼女はもう振り返ることはありませんでした。紅い淋しげな後姿が少しずつ小さくなってゆきます。そしてかごめちゃんは暗闇に溶けるように消えてゆきました。

森は再び静寂に包まれました。座り込んだまま木の幹に背を凭れさせる私と未だ興奮の醒めやらぬ健君は暫く言葉も交わさずにじいつとしていました。二人きりになってどれ程の時間が経ったでしょう。

最初に口を開いたのは私でした。

「健君…ちよつと言い過ぎたんじゃない？」

諫めるように健君に言いましたが彼は口を噤つぐんだまま俯うついています。

「確かにあの子は悪いお化けだったのかもしれないよ、でも…もし本当に親切で私達を案内してくれてたんだとしたらあんな言い方、可哀想じゃない」

健君はぼつりと呟く。

「未だ…かなり痛むか？」

「話を逸そらさないで！ 健君…あの子に冷た過ぎるよ」

健君は黙り込んでしまいました。すごく気不味い…。健君と二人きりだなんて本当はすごく嬉しい筈なのですが、今はとても居辛い。ざわざわざわ。

森の木々が風に揺られて騒ぎ出しました。湿った土はその上に座る私のお尻に不快な湿り気を伝えてきます。本当に気持ち悪い。居心地が悪い。居心地の悪い沈黙。

「俺だつて…」

不意に健君が口を開きました。

「俺だつて言い過ぎたと思ってるよ。何であんな事言っただろう。あんな子供に八つ当りしたんだな。カツコ悪いよ…俺」

ごめんな、と小さく口にした健君。

「何で私に謝るの？」

「何か、悪い気がしたから…」

悪かったよ、と続ける健君。その台詞をかごめちゃんに言っただけで欲しいです。

がさがさがさ。

草をかき分ける音。私達はぴくりと身を竦すくめました。恐い野犬でも出て来たらどうしよう。まさか血の匂いを嗅ぎ分けてやって来たのでしょうか。棒きれを手にした健君は私を守るように私に背を向けます。

がさがさがさ。

近くです、近くに何かがあります。ごくりと唾を飲む私達。その時、

草叢くさむらから何かが現れました。

「あ、あれ？」

「お前は……」

泥だらけの白い頬、泥だらけの紅い浴衣。

かごめちゃんです。かごめちゃんが戻って来たのでした。しかもその泥だらけの小さな手には不相応に大きなバケツが握られています。何処で見つけて来たのかは解りませんがそのバケツの中にはたっぷりの水が入っていました。まさか沢から汲んできたのでしょうか。彼女は実に重たそうに、よたよたとバケツを運んで来ます。浴衣はさつきよりも汚れていました。きつとまた何度も転んだのでしょうか。眉間に皺を寄せて一生懸命に重いバケツを運んでいるかごめちゃん。私の前にバケツを置いて、大きく深呼吸をしてから彼女は花が咲くように微笑みました。啞然と彼女を見詰める私達を尻目に、かごめちゃんは浴衣の袖をバケツの水に浸しています。

「かごめちゃん……何してるの？」

すると彼女は濡れた袖を軽く絞って、それを私の傷口にそっと当てました。

「痛っ……」

そう洩らすと、かごめちゃんは吃驚びっくりしたように手を引っ込めて申し訳なさそうな顔をして私の顔を見詰めます。

「うっん、大丈夫。ありがとう……」

するとかごめちゃんは再び花のような笑顔になって袖を私の足に当てます。何度も水につけて、何度も絞って、何度も傷口に当てる。冷たくて気持ち良い。傷の持っていた熱が引いて行くようでした。いつしかかごめちゃんの幼い顔は真剣そのものになっています。額に汗を滲ませて私の怪我を治そうと真剣になっているのです。

「お前：まさか、こんな事する為に戻ってきたのか？」

不思議そうな顔をするかごめちゃんは健君の顔をまじまじと見てから、こくりと頭こくりを垂れました。すると健君はふっと吹き出しました。

「やっぱり俺の間違いだったよ。こんな奴が化け物な訳ねえよな、ちつとも怖くなんかねえや」

健君は愉快そうに笑っています。すると、かごめちゃんも共鳴したように笑顔になります。

「健君、かごめちゃんに何か言う事あるんじゃないの？」

「え、何の事だよ……」

健君はさつき言っていた事を誤魔化すように嘯うそいています。

「謝りなさいよ、ほら！」

わかったよ、と苦笑いする健君。

「さつきは非道い事言つて悪かった。ごめんな……」

照れ臭そうに健君がそう言うとかごめちゃんもにっこりと笑顔を返してくれました。どうやら赦ゆるして貰えたようです。

小さな女の子の、大きな優しさのお陰で私の傷の痛みは随分と楽になりました。もう、ちよつとぐらいなら歩けそうです。

「おい千賀子、そのバケツ見てみるよ」

健君に言われて私はかごめちゃんが持つて来たバケツに目を遣ります。よく見ると何やら文字が書かれている事に気が付きました。

「これは……」

マジックで神社の名前が記されているのです。確かこれのバケツは神社の境内、私達が出発スタートした物置小屋の傍に積まれていたのと同じ物です。

「この子がこのバケツを持っているって事はあの物置小屋は近いって事だ。しかも水を汲んで戻つて来るまでの時間を考えると……出口は相当近いぞ！」

健君の表情にいつもの精悍さが戻つて来ました。そして健君は自信ありげににやりと口元を綻ばせます。そうです、健君はやっぱりこうでないと。

「そろそろ行こうか、千賀子の傷の手当ても早くちゃんとしないといけないからな。千賀子、立てるか？」

そう言つて立ち上がった健君は私を見降ろして、手を差し伸べて

きます。

どきん。

「うん！」

私は少し戸惑いながらも健君の手を取ってゆっくりと立ち上がりました。

草を？き分け、木々をすり抜ける。

かごめちゃんの先導を受けて少し進むと、辺りは一変して平坦な道のりになりました。そして。耳を澄ませば…鐘を鳴らす音。太鼓を叩く音。幽かなお祭囃子が聞こえてくるのです。戻ってきた、戻って来られた！ 私達は無事に帰って来る事が出来たのです。

私達の前をとことこと歩く浴衣の少女…かごめちゃん。最初は悪いお化けだと思って怖がっていたけれど、結果的に迷子になってしまった私達が暗闇の森を抜け出す為の手助けをしてくれていた女の子。照れ屋で無口だけれど、とても優しい女の子。泥んこだけれど、よく見ると可愛い女の子。結局この子は一体何者なのでしょう。かごめちゃんが醸し出す不思議な雰囲気はどうも私達と同じ人間であるように思えません。かごめちゃんは本当に…お化けなのでしょうか？ もしそうだとっても少なくとも悪いお化けではないのでしょうか？ 否、お化けと言うよりは寧ろ森の妖精さんなのかもしれないですね。ずきずきと痛む足を庇いながら歩いている私。そんな私の顔を健君は背中を丸めて覗きこみます。

「やつぱり痛いのか？」

「うん…ちよつと」

心配を掛けさせない為に出来るだけ痛いのは隠していたのですが健君には簡単に見破られてしまったようです。かごめちゃんも振り返って、大丈夫？ という深憂そうな瞳を向けてきています。結局、心配させてしまっています。

「私がおつちよこちよいだったから…」

舌を出して誤魔化し笑いを浮かべる私。

「全く、世話の焼ける奴だなあ」

「ごめん、と私が口にしようとしたその時…

…ちよつと、健君！

どきん。

健君は私の腕を乱暴に掴み、肩に手を回させて私の軀をひよいと背負いました。私は健君におんぶされているのです。

「けけ、けつ、け、け」

「何だよ、お前は鶏にわとりか？」

舌が上手く回らず、いつものように言葉を操れません。喋るのつてこんなに難しかったでしたっけ？

「けつ、健君！」

やっと言葉になりました。

「何してるのよ」

「おんぶだよ、見りやわかるだろ。だって怪我してるじゃん…お前」
どきん。

「あ、あ、ありがとう」

「か、勘違いすんなよ、お前が歩くの遅くて苛々してきたから背負ってやってるんだ」

足手まといなんだよ、と憎まれ口を叩く健君。私の顔は茹で蛸のように真っ赤になっている事でしょう。頭に血が上り過ぎて気を失ってしまいそうです。健君の背中。じつとりと汗ばんでいてちよつとべたべたするけれど、全然厭いやじゃない。温かくて、思ったより大きくて、すごく頼りになる背中。

どきどきどき。駄目。このままでは私の鼓動が健君に伝わってしまいます。私の心臓、温和おしなしくしていなさい！ お願いだから温和しくして！ 沈黙はいけません、鼓動が健君にも聞こえてしまうから。私は心音を隠すように健君に声を掛けます。

「重い？」

「重い！」

間髪入れずに返ってくる健君の繊細デリカシーに欠ける一言。全く、女の子に重いだなんて冗談でも言ってはいけません。少し感傷シヨックです。

「そ、そうだよね…ごめん、じゃあ、降りるよ…」

「やっぱりそんなに重くない。だから最後まで運んでやってもいいぞ」

ぶっきらぼうにそう言つて健君は私の臍を背負い直します。一体重いのか重くないのか、どちらなのでしょう。気が付くと私達は見覚えのある道を歩いていました。徐々にはつきりと大きく聞こえてくるお祭の楽しい音。終点ゴールはもう直ぐそこです。かごめちゃんもいつの間にか私達と並んで歩いていました。すると彼女はその団栗のような瞳で興味深そうに私の手首を凝視みつめしています。

「どうしたの？」

彼女の視線は私の腕に嵌はめられたあの光る腕輪に釘付けになっていました。興味津津といった様子です。どうやら相当もの珍しい、
、、、、のでしょう。

「この腕輪？」

こくり。

「あげよつか？」

そう言つた途端、健君が背中の中の私に振り向く。

「何言つてんだよ！ それは肝試しの証拠だろ！」

「もういいじゃない別に、それにかごめちゃんが居なかったら出られなかったかもしれないんだよ…お礼にあげようよ」

ふんつ。健君は久しぶりに鼻を鳴らす。判りにくい表現ですが健君もどうやら了解してくれたようです。私は腕輪を外してかごめちゃんに差し出す。するとかごめちゃんは小さな指でそれを摘み取り、嬉しそうに腕に着けました。ぶかぶかです。

「剛に何言われたつて知らないぞ」

「うん、私が謝る」

「ふんつ、俺も謝つてやるよ」

目の前に少し薄い灯りが見えてきました。漸く暗闇の森の切れ間

が現れたのです。本当に長かった。実際には四十分程度だったのでしょうが私には三時間にも四時間にも、否もつと、丸一日ぐらいに感じます。私達の冒険も愈々（いよいよ）終わるのです。

森の終わりを前に、かごめちゃんがふと立ち止まりました。

「今度はどうしたの？」

私達も立ち止まります。するとかごめちゃんは私達の顔を交互にじいつと見詰めています。まるで確りと、その角膜に焼き付けるかのように。そして彼女はにつこりと白い歯を見せて笑いました。すると、かごめちゃんは私達に小さく手を振って森の奥へと駆け出して行きました。

ばいばい。

振り向き様にかごめちゃんの口唇がそう動いたように見えました。「どこへ行くのかごめちゃん！」

心配そうに声を上げた私を静かに健君が諭しました。

「やつぱりあの子は俺達とは住む世界が違うんだよ。この森の中であの子の世界と俺達の世界が少しだけ重なっていただけなんだろうな。俺達が帰る場所はある子にとって帰る場所じゃないんだ、きっと。」

だから、と言って健君は少し溜める。

「あの子はあの子の世界へ帰って行くんだよ」

私達は彼女の背中をただ見送っていました。真っ赤な浴衣を着たかごめちゃんの小さな後姿はやがて暗闇の黒に溶けて、跡形も無く消えてゆきました。矢張りかごめちゃんは私達の知らない世界からやってきた女の子だったのでしよう。彼女の正体は結局判りません。それでも一つだけ判る事があります。

妖怪でもいい…悪魔でもいい…お化けでもいい…幽霊でもいい…

何でもいい…

…兎に角、かごめちゃんは…とっても良い子です。

かごめちゃんの姿が消えると私達は再び森の出口へと向き直りました。私を背負ったままの健君は柔らかい光の浮かび上がる出口へ

とゆつくり歩き始めます。

「なあ、千賀子？」

ん？ と応える私。続ける健君。

「ここに来る前に『好きな人いるか？』って話になっただろ」

「え、あ、うん…それがどうしたの？」

「それなんだけどな…」

健君が健君らしくなく、もじもじしています。すると彼の背中から律動的な震動が伝わって来ました。鼓動？ まさか健君がどきどきしているのでしょうか。健君の心臓の音が私の身に響いてくる。それに共鳴するように私の心臓も早鐘を鳴らします。

どきん。

「俺な。少なくとも千賀子の事…キライじゃないぞ！」

照れ臭そうに、半ば自棄^{やけ}っぱちにそう言い放つ健君。そおつと後ろから彼の顔を覗き込むと頬が真っ赤になっていました。そして、私も健君の言葉に共鳴^{シンクロ}します。

「私も健君の事…キライじゃないよ」

くしゃり。

私の隣に腰を下ろしている夫はとうとう本日三本目のビールを飲み干して、アルミ缶を握り潰しました。

「あなた、ちよつと飲み過ぎだと思っよ」

私がそう言つと夫はむくりと立ち上がります。そして、ふう、と大きく息を吐き出しました。

「俺、やっぱり探して来るわ…目を離しちゃった俺に責任があるよな」

うちの娘は一向に帰ってきません。夫は俯いたまま、ぼそぼそと呟いています。ふと見上げると彼の顔はビールを三本も飲んだにも拘らず全然火照っていないのです。きつと娘が迷子になってしまった事に非道く責任を感じているのでしょうか。顔が赤くなるどころか

寧ろ少し青褪めているような気がします。

やがて店を畳み始める屋台もちらほらと現れ始めました。もう、夏祭りも終わろうとしているのです。しかし、うちの娘は未だ戻って来ません。ちよつと行つて来る、と言い残して娘を探しに行こうとする夫。

「健君！」

はつとなつて私を振り返る夫は照れ臭そうに、な、何だよ…、と地面に視線を這わせながら返事をしました。勿論、私も照れ臭かったですよ。何しろいつもは「あなた」とか「お父さん」と呼んでいますし、それに夫を名前で呼ぶ事など娘が生まれてからは一度もなくなつてしまつていましたから。でも、昔の事を思い出していたら久しぶりにそう呼びたくなるじゃないですか。「健君」って。

夏祭り。そして神社の森の肝試しは私にとって忘れられない思い出。

「小学生の頃、この奥の森で肝試しした事。健君も覚えているですよ？」

何故そんな事をいきなり言うのか、と言う表情を浮かべながら健君は怪訝な顔をしながらも、ああ、と相槌を打ちます。

「お前も怪我しただろ。あの森は危ないんだよ！」

「でも、あの子が助けてくれたじゃない。紅い浴衣の女の子が」

女の子…、と健君は私の言葉を復唱しながら記憶を辿るように視線を右斜め上に泳がせています。全く物忘れの激しい人です。

「ほら、あの森には不思議な女の子が居るじゃない」

健君は腕組をして思い出そうとしています。

疎らになつた人々の隙間から小さな影が浮かび上がってきました。
まはり
とことこ、とことこ。

慌ただしく、忙しそうな聲。
あしおと
聲は真つ直ぐに私達の方へ近付いてきます。

「ほら、うちの子も帰つて来たよ」

私が境内の奥へ目を遣ると健君も釣られてそちらを見ます。健君の心配を余所に、娘は無事に一人で帰って来られたようです。

リズムカル
律動的に揺れる真つ黒なおかつぱ頭。

団栗のような円い瞳。

餅のように白くて柔らかそうな頬。

泥んこになった紅い浴衣。

花のような笑顔を浮かべた私達の娘は嬉しそうに私の胸に飛びついて来ました。そして私は土で汚れた娘の髪を撫でました。私は優しく彼女の名前を呼びかけます。

「お帰り、かごめ」

すると、娘もにこりと齒を見せて笑います。娘の顔をよく見ると何か少し成長したような気がします。かごめは私達の知らない所でまた一つ大人になったようです。どこかで冒険でもして来たのでしょうか。

「おお、かごめえ！」

緊張の糸が切れた健君も半ば涙声で娘の名前を呼びながら、その小さな軀を愛おしそうに抱き上げます。相当かごめの事が心配で気がでなかったのでしょうか。

「よかった…心配したんだぞ！」

かごめはきやつきやと声を上げて喜んでいます。かごめは健君とお父さんの事が本当に好きですから。嬉しそうな父子に水を差すようで悪いと思ったのですが私は二人に声を掛けました。

「じゃあ、そろそろ帰ろつか。明日は月曜日で、かごめは学校があるんだし、あなたも会社行かなきゃいけないでしょ、帰ってお風呂入って早く寝なきゃ」

そうだな、と答える健君はゆっくりとかごめを地面に下ろします。かごめを真ん中に挟んで私達三人は手を繋いで家路に着きました。「ねえ、かごめ。どこ行つてたの？」

ひみつ。かごめは悪戯っぽくそう答えて、私と健君の顔を交互に見比べながらにやけています。私と繋いでいるかごめの右手には私

達が買ってあげた覚えのない玩具の腕輪が付けられていました。蛍光塗料を溶かし込んでいる暗闇で朦朧ぼんやりと光るゴム製の腕輪。しかもかごめの手には大き過ぎるようで、ぶかぶかです。こんな古臭い玩具、今夜のお祭で売っていたのでしょうか。

「かごめ、この腕輪は？」

かごめが答えた言葉は相変わらずの、ひみつ。

「そっかあ、秘密ならしかたないよねえ」

諦めるように私がそう洩らしていると、かごめは誇らしげにその光る腕輪を眺めています。きっとかごめにとってそれは勲章のような物なのでしょう。

私はふと夜空を見上げます。

お祭の灯りが消えた夜空はいつも通りの静かな藍色の空。目を凝らすと小さな星までよく見えます。そしてその中でも一際目立つ大きな円い月。私達三人は銀色の月光を浴びながら歩いています。かごめの歩幅に合わせてゆっくり、ゆっくりと。

神社の奥の暗闇の森。森の奥には別の世界への入り口がある。子供の頃そんな噂を聞きました。あの世に繋がっている、地獄に繋がっている、魔界に繋がっている、異次元に繋がっている。はたまた未来に繋がっている、過去に繋がっている。噂は様々でした。そして、森の中には別の世界からやってきた悪魔や妖怪、お化けや幽霊が居る。そんな悪い怪物に別の世界へ連れて行かれてしまう。

ところで私達が子供の頃、森の中で出会ったあの紅い浴衣の少女は…一体何者だったのでしょうかね。

私の手を握るかごめの手。彼女の腕につけられた安っぽい腕輪が、優しく仄かな光を浮かべています。

ふわふわ、と。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8441o/>

お祭りの夜に

2010年11月11日22時10分発行